# 【雑想】チャングム（2）　料理という道

斉観堂鍼灸・気功治療院　鈴木斉観

「チャングムの誓い」を観て、私は自らの鍼の道に対する真摯さを再確認する。現在、まだ私が観ているのは宮廷料理人時代だが、チャングムの料理に対する真摯さは道を歩む者全てに通じる。道とは単に職業ということではない。料理への真摯さは格別のものだ。道に生きている彼女には、そこに人生の中心軸があって、発見・創造の喜び、そして失敗の悔しさがある。彼女にとって、俗世間の楽しみは興味を抱きようがないものである。

チャングムの料理に対する真摯さは、美味しさや、食べる人の健康を気遣うことだけでなく、料理のメッセージ性ということにも及んでいる。野苺の砂糖漬けは、チャングムが死にゆく母に食べさせたという話によって、その甘酸っぱさはメッセージを伴って王の口に入り、王を感動させた。

様々な人生があって良いと、もちろん私は思っているが、道に生きる人生はお薦めである。たいへんな様でいて、最も悩み少なく、それでいて活き活きとした人生を歩めるのではないかと思っている。

現代日本の若者が抱える様々の問題の根は、そうした真摯に取り組む物事を見出していないということに尽きるのではないか。若者が様々な職業を転々とすることは必ずしも悪いことではないが、それは人生の中心軸を見つける為の過程であって欲しい。最初から俗な遊びの為の金欲しさだけの仕事への取り組みでは、中心軸は見つかるはずがない。

自分は何が好きなのかということを発見する機会を、「勉強、勉強」と子供の時に奪われてしまっている若者には、人生の中心軸を見出すことも難しいものになっているのではないか。

「チャングムの誓い」に料理の奥深さを感じ、そうした世界に入っていく人がいるのは良い事だと思う。だが、料理に限らず、様々な事に奥深さはある。問題は取り組み方である。今、多くの人は、マニュアルに頼り過ぎ、頭偏重になっている。チャングムを指導したハン・サングンは、彼女に何度も水を持ってこさせる事で、水を飲む人を気遣う心に気が付かせた。また食べられる野草をたくさん摘ませて、野草の知識を身に付けさせたりした。それは単に知識ではなく、感をも育てたはずである。

抽象的な知識以前に具体的な知識がある。昨年、小学三年の娘の参観会に行った。国語の授業で、教科書の内容は「大豆が変身する」という話だった。先生は枝豆（未熟な大豆）と熟した大豆、そして豆腐や醤油など大豆製品を用意していた。教科書に入る前に、それらをじっくりと見せ、生徒に考えさせた。教科書の中の「大豆」という言葉の具体的姿、大豆が変身した具体的姿を実際に知っていてこそ、教科書の文が活き活きとしたメッセージとして正しく読めるのである。いきなり文章という抽象世界を見せたとしたら、それはとてもつまらない文章となる。本来、知りたいという意欲がある子供にとって、楽しいはずの学習が苦痛な勉強となる。それはチャングムがハン・サングウの課題に苦労したとは別種の虚しい苦労である。

子供たちは学習や生活の中で、自分が好きなものを発見し、縁や運の中で自分が歩む道を決めていく。子役時代のチャングムが「ずっと辛かった」と語っていた。辛くても道が定まっていたから、彼女はしっかりと歩んで来られたのである。（2008 年 3 月啓蟄）